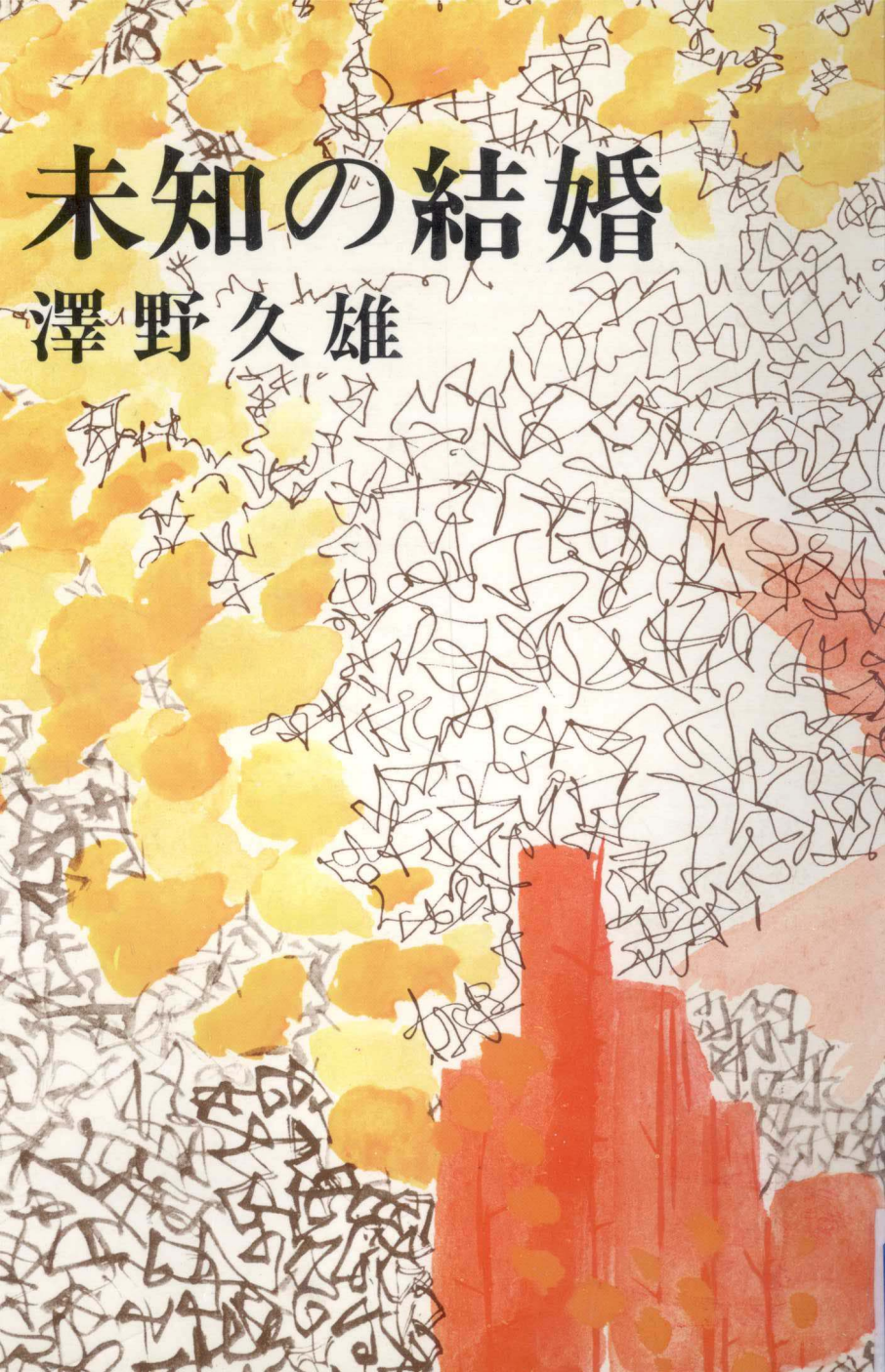


未知の結婚

澤野久雄



未知の結婚

澤野久雄

新潮社版

みち けつこん
未知の結婚

昭和50年2月10日 印刷

昭和50年2月15日 発行

著者 さわ の ひさ お
澤 野 久 雄

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式会社 新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町 71

電話 業務03(266)5111 振替東京4-808
編集03(266)5411

印刷所 二光印刷株式会社

製本所 植木製本株式会社

定価 900円



© Hisao Sawano, Printed in Japan, 1975

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

似顔絵	(にがおえ)	5
花蠟燭	(はなろうそく)	24
季節風	(きせつふう)	50
通過客	(つうかきやく)	71
青海波	(せいがいは)	98
記念碑	(きねんひ)	124
里程標	(りていひょう)	157
二重星	(にじゅうせい)	179

未知の結婚

似 顔 絵

偶然、通りかかった道のほとりに、四人の似顔絵かきが、それぞれに画板をかかえて立っていた。ジャムパーを着た、青年。タートル・ネックのセーターの男。それから、汚れたバアバリーを羽織った若者と、紺か黒か見分けがたい、厚手のセーターに身を包んだ女。女は、二十五、六になるだろうか。ちょうど灯の消えたビルの横手で、宵の銀座の明るみを歩いて来た目には、その一劃は不意に暗かった。思いがけない所で、洞窟に出会ったようである。その洞窟の中に、女の顔だけが、仄かに白い。

「いかがですか。五分間で出来ます。」

冷えて来た夜風の中で、女の声が澄んで流れた。

似顔絵かきのうしろには、四つの大きなイーゼルが立てられていて、それぞれに何枚かの似顔絵が、影ったままに掲げられていた。総理大臣の顔、ロブリジータの顔、水谷八重子の顔、井筒も見覚えのある、若い流行歌手の顔。コンテの上に、部分的に水彩絵具で

彩色したものもあるようである。

「描いてもらおうか。」

と、未知が井筒をふり仰いだ。

「よしなさい。」

彼は、絵かき達には聞こえないように、低い声で言った。

しかしその応答は、似顔絵かきの注意を惹いたにちがいがなかった。彼等四人と、井筒たちの他には、そこには誰も立っていなかった。通行人は全く無関心に、井筒たちの背を歩き来していた。ジャムバーの若者が、未知の方へ笑顔を向けて、

「どうです。お嬢さん……。」

未知が青年に、笑い返している。その微笑が、井筒をはっとさせるほどやさしく親しげだった。

「行こう。」

井筒は、未練気もなく歩き出していた。小柄な娘は、すぐ肩先に追いついて来ながら、
「記念に描いてもらって置こうかと、思ったのよ。こうして、お父さんと一緒に銀座を歩いた記念に……。」

「記念はいいけど、何も、ああいう人に描いてもらわないでもいいだろう。」

「あら、ああいう絵描きだから、描いてもらおうかと思ったのよ。あたしだって、どこ

国のどんな町角で、ああして似顔絵を描くことがないとも限らない。」

——おや、そんなことを考えていたのか。

と、彼は思った。

未知は井筒の、一人娘である。一人っ子である。世間なみの家庭に育っていれば、そろそろ養子を迎える話でも出る年ごろなのだ。しかし彼女は春、芸大の油画科を卒業していた。自分では遠からず、フランスへ留学するつもりでいるのである。

いわば画家の卵だが、幸い、選ばれた道を歩いて来ている。芸大へ入れたことも、その学校で、優れた教授の下で勉強出来たことも、世間的には、幸運だったにちがいない。そういう幸運の中であって、おそらく不運を積み重ねて来たであろう街頭の絵師に、似顔を描かせようかという娘の気持を、井筒は不遜なものを見た。女のもつ残忍なものが、ちらと影を見せたかと思つて、急いで娘の口を封じたつもりだったが、あるいは未知は、彼が考えたより遥かに謙虚であつたのかもしれない。なるほど彼女の歩こうとしている道は、峻しくて遠いだろう。いつの日、どんな哀しみに打ちひしがれることが、ないとも限らない。それを考えると、ゆきずりの似顔絵かきにも、手をさし伸べたかつたのかもしれない。彼は、せめて自分の手もとに居る間だけは、出来るだけこの娘に優しくしてやりたいと思うのだった。

井筒啓二は小説家である。

尤も、彼は自分から「小説家」だと名乗ることは、滅多にない。旅館に泊ると、宿帳の職業欄には、多くの時、「無職」と書く。外国行きの飛行機の中で、入国の書類を書く時は、「Writer」と記した。話の中で、そういう言葉を使わねばならない場合は、「物書き」と言ったり、「小説書き」と言ったりした。

父親が小説書きで、娘が絵描きだといえ、こういう種類の人間に縁のない世間の人は、「まあ、なんという結構なお家庭……。」

妻の八重などは、知人からそういう挨拶を投げかけられて、当惑することがしばしばあるようだった。苦笑して、井筒に告げることがある。誰にも分ってはもらえないわ、と嘆いている目を見せることもある。彼女にしてみれば、すでに三十年にもなろうという昔、——つまり井筒と結婚する時、小説家を夫とし、絵描きを娘に持とうなどとは、考えてもみなかったにちがいない。その頃でも、彼は既に小説を書いてはいた。しかし、何所から注文が来るわけでもない。いわば無尽蔵に、営々として、あてのない原稿を書き続けているわけだ。尤も、その頃の彼は、大きな新聞社の記者であった。若かったから給料は安かったが、定収入があった。井筒の金遣いが荒いから、貧乏はしていたが、それでも最低の生活は保証されていたということが出来る。

二人の間に生れた子は、あとにも先にも未知ひとりだけである。ちょうど第二次世界大戦の始まる直前のことで、九月下旬のあるさわやかな朝であった。

芸大へ入ってから後のことだが、未知が自分の生れた日のことを、しきりに聞いたことがあった。

「いい、秋晴れの日だったわ。」

妻の八重が、遠い目をして言った。

「それで、どんな風にして生れて来たの？」

「教えてやろうか。お天気はよかったが、生れて来ることはやはり大変だった。」

と、井筒は言った。

今のように、妊婦の誰も彼もが、いざという時になると、病院へ入院してしまうような時代ではなかった。井筒たちは守口市の郊外——その頃は大阪府北河内郡三郷町大枝と呼ばれた土地の、小さな長屋の端の家に住んでいた。近くには、大根畑が広がる。少し歩くと、沼がある。蓮池がある。雑草の生い茂った荒地がある。その向うには、生駒山が聳えている。山の頂きには航空燈台があつて、夜になると美しい光芒を放った。つまり、はじめて大阪の新聞社につとめるようになって、井筒はそこに、新築の借家を見つけたのである。新開地であつた。

その日、八重は朝の五時ごろから、陣痛が激しくなり出した。井筒は、助産婦を迎えにゆく。夫婦とも東京の人間だから、附近に身寄りはない。まだ、知り合いの家も少ない。彼も、いつものようには朝寝などしていられたなかった。

あとから考えると、それはなかなか大変な出産だったようである。中年の助産婦は万全の用意を整えて待つが、八重は激しい痛みにうめき、その痛みが遠退くと、忽ちうとうとと眠りそうになる。重ねて痛みが起つて来ると目醒めるが、治まるとまた、眠りの中へ陥ちてゆく。彼は助産婦に頼まれて、濃いコーヒを淹れる。それを飲ませて、八重を眠りの底から引き出そうというのだった。

七時が近くなつて、漸く出産が始まつた。しかし八重はもう疲れ切つていて、分娩するだけの力がない。助産婦の、八重を激励する声が、高く忙しい。井筒は呼ばれて、部屋に入った。そして生命が、いまそこに誕生するという場面を、ともに見守らねばならない立場に陥つた。助産婦は、いくらかの危険を感じていたのかもしれない。そして井筒を、その場に立ち合わせたものようである。

「そりゃね、お母さんは疲れてしまつて、もう君を生む元気がない。だから未知は、頭を半分ぐらい出して、そのまま止つてしまつたんだ。時間を計つたわけではないが、随分、休んだままだったよ。だから未知は子供の時、まるで天使が頭につけている輪のように、頭の鉢にくっきりと輪がついていたものだ。そこだけ、お母さんに締めつけられた跡がついていたんだよ。」

「いやだわ。」

と、未知は紅くなつた。

同じ女として、母の肉体から、自分の肉体を思い描くのだろうか。

「しかしね、自分の子がこの世に登場する、その姿を、ちょうど花道のせり出しから現われる役者を見るように、終始見ていた父親というものは、世間にも余り存在しないのじゃないかな。勿論、僕はお母さんより先に、君に会ったわけだ。そしてそれが、朝の七時だ。」未知は赤ん坊のころ、ひどく体が弱かった。すぐ、風邪をひく。腹をこわす。その内に、小児喘息の兆候が現われて来る。むずかる子を抱えて、まだ若い母が病院から病院へとかけまわる姿は、井筒の目にもいたましかった。

ところがこの娘は、物ごころがつくようになると、絵を描くことが妙に好きになった。クレオンやパステルを与えて置くと、黙り込んで絵を描いている。

「絵を習いにやりましょうか。」

「うむ。この子がやがて母親になって、自分の子供に絵を描いてくれとせがまれた時、そこにある花や、猫や、犬ぐらい、さらさらと描いてやれるようだと、母親としても幸福かもしれない。」

話が決ると、未知は阪神間に住む新制作派の会員の家へ、週に一度ずつ通うようになった。

十年ほどして、彼等は再び、東京へ戻って来た。未知が、小学校の三年になった時のことだ。井筒が同じ新聞社の東京本社へ、転任することになったからである。

戦争が終つて、まだ五年にも満たない頃だった。物資は欠乏していた。東京には、借家などなかった。一家は湘南大磯の海近くに、ある家の離れ家を借りて住んだ。海辺の空気は、未知の体にはよかったのであろう。少女は急に、健康になって来た。それに連れて負けず嫌いな、気の強い子に育つて行つた。そしてここへ移つてからも、週に一度か二度、海辺の松林の中の、画家のアトリエへ通いつづけていた。そういう状態は、彼女が中学を終えて高校へ通うようになっても続いた。

井筒の小説も、少しずつ陽の目を見るようになって来ていた。が、未知がある日、「あたし、芸大を受験するわ。」

と言ひ出した時、この家には不意に、陰悪な空気が立ち上つたのである。

井筒には、娘を画家に育てようなどという気持は、更になかった。それまでは娘が絵を描くことを、一つの趣味として肯定していたのだった。いい絵を見て、喜べるような魂を、子供の中に植えつけてやりたかった。昔風に言えば、一種の情操教育である。

「美しいものを見て、美しいと感じられるような人間になれ。」

これは井筒が少女時代の未知に対して、何度か口にした言葉であつた。また、将来、なにか辛い状態に追い込まれたような時にも、絵が描けるということは、一つの慰めになるだろうと思つていたものだ。

井筒の家族三人は、すでに長い戦争を体験して来た。彼も応召して、二年間は兵役に服

した。その間、内地の高射砲陣地に配属されていたが、戦争のいたみは骨まで沁み通っていた。彼は、生きて帰った。しかし彼等の周囲には、帰らなかった若者が決して少なくない。女の中には、婚約者や夫を失った者が、町にあふれていた。激しいインフレーションの中で、彼女たちの生活は苦しかった。そういう生活を見きするにつけ、井筒は将来、娘の手に、何かの職をつけさせてやろうと考えていたのである。たとえば、徹底的に語学の勉強をするのもいい。建築の設計を習うのもいい。あるいは、素朴な職人になってもいいだろう。これからの女は、自分の生活を支えるくらいの腕は、持っていなければならなと思うのだった。しかしそれも、いざという時の用意のためだった。出来れば娘には、平凡な結婚をさせて、無事な一生を送らせてやりたかった。

だから井筒は、娘を絵描きにしようなどとは、少しも考えてはいなかった。

「そんな無謀なことを考えるのは、止めろ。」
と、彼は言った。

「僕は未知に、芸術家になるための苦勞など、させたくないよ。」
すると娘は、

「お父さんだって、親の言いつけに叛いて、小説家になろうとしたでしょう。」

自分では、自分のやりたいことをやって来て、子供にはそれをさせないとは、父親の横暴というものと主張する。これは世間にありふれた、親子の対立であろう。しかしこの

家では、未知が高校をなかばまで進んだころから、漸くその激しさを増した。

井筒がずっとあとになって気づいたことだが、この家の父と娘との対立では、常に娘が最後の勝利を握ることになった。進学志望でも、渡仏の希望でも、すべて娘の思い通りになっている。あるいは井筒が反対する度に、娘は闘志をふるい起したのであろうか。

渡欧の計画は、未知が芸大へ入った頃には、彼女の中ですっかり固まってしまっていたらしい。

いつからか、日仏学院へ通うようになっていた。フランス語を修得するためである。

「女の子が何も、フランスまで行かなくとも……。」

井筒は妻に向って、よくそういうことを言うようになった。

「それに、女の絵描きがバリーで暮して、だんだん崩れてゆく。それを考えると危くて出してやれないよ。」

「あの子が、そんなことはありませんまいけれど……。」

母親というものは自分の娘を、とかく信頼してしまうものだ。あたしの娘が、と思う。あの子に限って、と言う。

井筒はそういう妻の考え方を、甘い、と思うのである。なるほど母と娘との間には、同性として暗黙の内に通い合うものはあるにちがいない。その上に、娘は母親にとって、疑